

受験勉強を哲学する

受験生のみなさん、毎日の受験勉強、本当につかれますね。「何のためにこんな事してるんだろう」って思うことはありませんか？

今回の話題は「受験勉強を哲学する」です。勉強の合間に少し考えてみませんか？

最初に確認したいのは「受験勉強」って何？ということ。定義すると、ある人がそこで学ぶことを希望する高等学校や大学等の高等教育機関が、そこで学ぶに足る生徒や学生を選定するために行う試験に合格するための知識や能力を獲得するための勉強であるといえます。平たく言えば「入試」に合格するために行なう勉強のことです。しかし、それだけでは今日の「受験勉強」を説明したことにはなりません。何故ならそこに入り込んでくる「競争」という要素を説明できないからです。つまり「受験勉強」が何故「競争」という側面を持つのかということまで説明しないと「受験勉強」という行為の本質を解明したことにはならないのです。

では、なぜ受験で競争が起きるのか。別な言い方をすれば、一つの教育機関に定数を上回る受験希望者が集まるのは何故なのか。教育を受けることを希望する者に対して、教育機会の提供数が少ないからという解釈は成り立ちません。現実問題には特定の教育機関に受験希望者が過度に集中することで競争が生じているからです。

そう、ここに至って「いい学校」という認識の存在が、その原因として浮かび上がって来ることになります。誰しものが「いい学校」と評価される教育機関で学ぶ事を欲するが故に、競争という性格が「受験勉強」に付与されるのです。

ではさらに、「いい学校」というのは何なのか。別な言い方をすると、「いい学校」という評価は何を基準になされているのか、を問わねばなりません。結論を先に言うと、それは「その教育機関で学んだ後の進路がどのようなものであるのか」ということで評価されているのです。端的に言えば、高校の場合は大学への進学率が、大学の場合には卒業後にど



のような企業・団体（国・自治体の組織を含む）にどのような職種で採用されるかという実績の多寡が判断の基準とされます。

つまり、高等学校を評価するにあたっては大学への（それも言ってしまうと有名大学への）進学率が評価基準となり、大学では卒業後に「いい仕事」に就けるかどうかということが判断基準になるということです。

今日の社会における受験勉強の役割

問題はここにきて純粋な教育という分野を超えて、現代社会の在り方と密接なつながりを見せてきました。今度は「いい仕事」について考察しなくてはなりません。

「いい仕事」とは何なのか。これも今日の社会的な評価を先に示してしましましょう。今日的な価値観に従うと、一般に「いい仕事」とは、安定していること・収入が多いことなど、労働条件が良い職業とされています。そこにあるのは現実の社会における格差そのものです。

現実の社会には、一方では大企業に所属して年収一千万円を超える収入を得る人もあれば、非正規雇用労働者として年収200万円に満たない収入でやりくりしている人もいます。この現実の格差を前にして、誰しものがより良い労働条件で働ける職業に就きたいと思うでしょう。その格差の根拠がいわゆる「学歴」であるとされるからこそ、学生本人の意向はともかく、周囲の人々は「いい学校」に行きなさいと強く勧めることになります。

これが「受験勉強」というものの本質なのです。

「受験勉強」の本質が見えたところで、次にそれがみなさん一人ひとりに、あるいは社会に、どのような影響を与えているのかについても考察しなくてはなりません。

「受験勉強」は今に始まったことではなく、私たちの世代（筆者は現在60歳です）が高校生だったころには既に存在しており、時に「受験競争」などと評されることもありました。受験に失敗して自ら命を絶つ学生も後を絶たず、「受験戦争」と称されもしました。当時の受験制度は学力ではなく受験技術を競うものだとの批判もあり、改善と称して共通一次試験が導入されました（あまり効果があったとも思えませんが）。

受験勉強が高校受験や大学受験に際して、中学生や高校生にかなりの負荷をかけていることは紛れもない事実です（近年では「就活」という競争もあります）。と同時に、実は今日の社会にとっても非常に大きな影響を与えているということにも

目を向けなくてはなりません。

それは先ほど少し触れた、格差社会の問題と深くかかわっているからです。格差社会は自然にできた現象ではありません。意図的に作られ、維持され続けている現象なのです。そして「受験勉強」あるいは「受験競争」はそれを維持する一つの装置として働いている。ここに「受験勉強」の現代社会における役割があります。

なぜ格差は存在するのでしょうか、あるいは作られ続けるのでしょうか。そこには現代資本主義の利潤追求という動機が働いているのです。専門的な説明を始めると長くなるので、ごくかいつまんで説明をします。

みなさんもアダム・スミスという経済学者の名前は聞かれたことがあると思います。彼は人間の特徴を交換する動物であるとして、商品の交換価値に着目し、その価値がその商品を作るために費やされた人間の労働の量にあるとしました。労働価値説と呼ばれます。市場における商品の価値（交換価値）は、その商品を作るにあたって平均的に投下された労働の量によって決まります。

実はこの「平均的」というのがみそで、例えば同じ商品を甲・乙・丙の三社が作っているとします。この商品を100個作るのに各社が投下した労働量がそれぞれ90時間・100時間・110時間であったとすれば、商品1個当たりの平均的な投下労働量は1時間分となります。この場合、すべての商品が売れたとして、各社が受け取れるのは100時間分の対価となります。その結果各社の収支は甲が10時間分、乙は収支同じ、丙は10時間分の損失となります。仮に時給が1時間1000円なら、甲の利益は10000円、乙は0円、丙は10000円の損失となります。乙や丙が利益を得ようとするれば生産効率を上げる技術革新をするか、賃金を下げるしかありません。賃金の抑制は利潤を追求する資本主義では当然のことなのです。

しかし、自社の従業員の賃金を下げることはそう簡単ではありません。企業の利益を代弁する経営者団体は、このために自社の従業員の生活にかかる費用を下げることで、相対的な賃金の抑制を図ろうとします。生活費用を元に決められるのが賃金なので、生活に必要なものやサービスの費用を下げれば、賃金は低い水準に抑えることができるのです。そのために農業生産物や福祉サービスなどの費用を低く抑

えようとしています。それはつまりその分野で働く人々の賃金を低く抑えるということに他なりません。これが格差が維持され、あるいは拡大される理由なのです。そのための道具として使われているのが学歴ということになり



ます。受験勉強を頑張って高学歴を手に入れたものは高い賃金を、そうでないものは低い賃金で我慢しなくてはならない。そのような考え方を社会的共通認識あるいは「常識」として、広く国民に押し付けてきたのです。

さらにその何が問題なのか。現代の社会では、誰しものが他の誰かの作る商品やサービス抜きには生きていくことができない状態にあります。誰しものが他の誰かのために商品やサービスを生産し、誰もがほかの誰かの生産物やサービスによって暮らしているような経済関係の中にあっては、誰もが対等な立場でなくてはなりません。先にアダム・スミスのお話を紹介しましたが、商品やサービスの交換においては等価交換が行われることが経済の大原則なのです。それがあつた部分において歪められているのが問題なのです。

それではここで改めて質問をしてみましょう。「受験勉強」は誰のためにあるのでしょうか。もちろんみなさん一人ひとりが、それぞれの目標に向かって取り組むものではあります。しかしその裏側には格差を広げ・維持することに利益を見出す資本主義の都合があることを知っておいて頂きたいと思つたいます。

若いみなさん。みなさんをお願いしたいことがあります。みなさんの「**受験勉強**」の結果がどのようなものになるにせよ、**学歴で労働条件が決まるという現状を決して当然のものとして受け入れることのないようにして頂きたいと思つたのです。格差の問題は人類社会の持続可能性にとって解消しなくてはならない問題です。そしてそれは資本主義という経済制度では決して解消できない問題であることはすでに見たとおりです。ここでは触れませんでした。気候変動の問題も資本主義に由来する問題であり、これらの問題を解決するためには、資本主義という経済制度を変えていくことが不可欠であるということを知っておいてほしいのです。それが今グレイトリセットを求める世界の声となっているので**



ポスト資本主義として私たちが提案しているのは「社会契約経済制度」です。興味のある方はぜひ検索してみてください。ではみなさん、グッドラック!

「唯契の窓」は毎月1日無料で発行中です。



『唯物論的社会契約論概論』は清風堂書店から刊行されています。書店等でお求めください。

